近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第四十四回）

「旧都・平城京」

聖武天皇天平十二年（７４０）奈良・平城京から山城国（現在の京都府南東部の旧国名）の南の恭仁京に遷都した後に奈良の都が荒廃していくのを見て嘆き悲しむ歌。（２首）

1）立ちかはり　古き都と　なりぬれば
道の芝草長く生ひにけり

作者　田辺福麻呂歌集　巻6—1048

（解説）都が移っていってしまったので、立派だった奈良の都も、古い都になってしまったので、道端の芝草（しばくさ）が長く伸び生い茂ってしまった。

2）なつきにし、奈良の都の　荒れゆけば、
出で立つごとに、嘆きし益さる。

作者　田辺福麻呂歌集　巻6—1049

（解説）

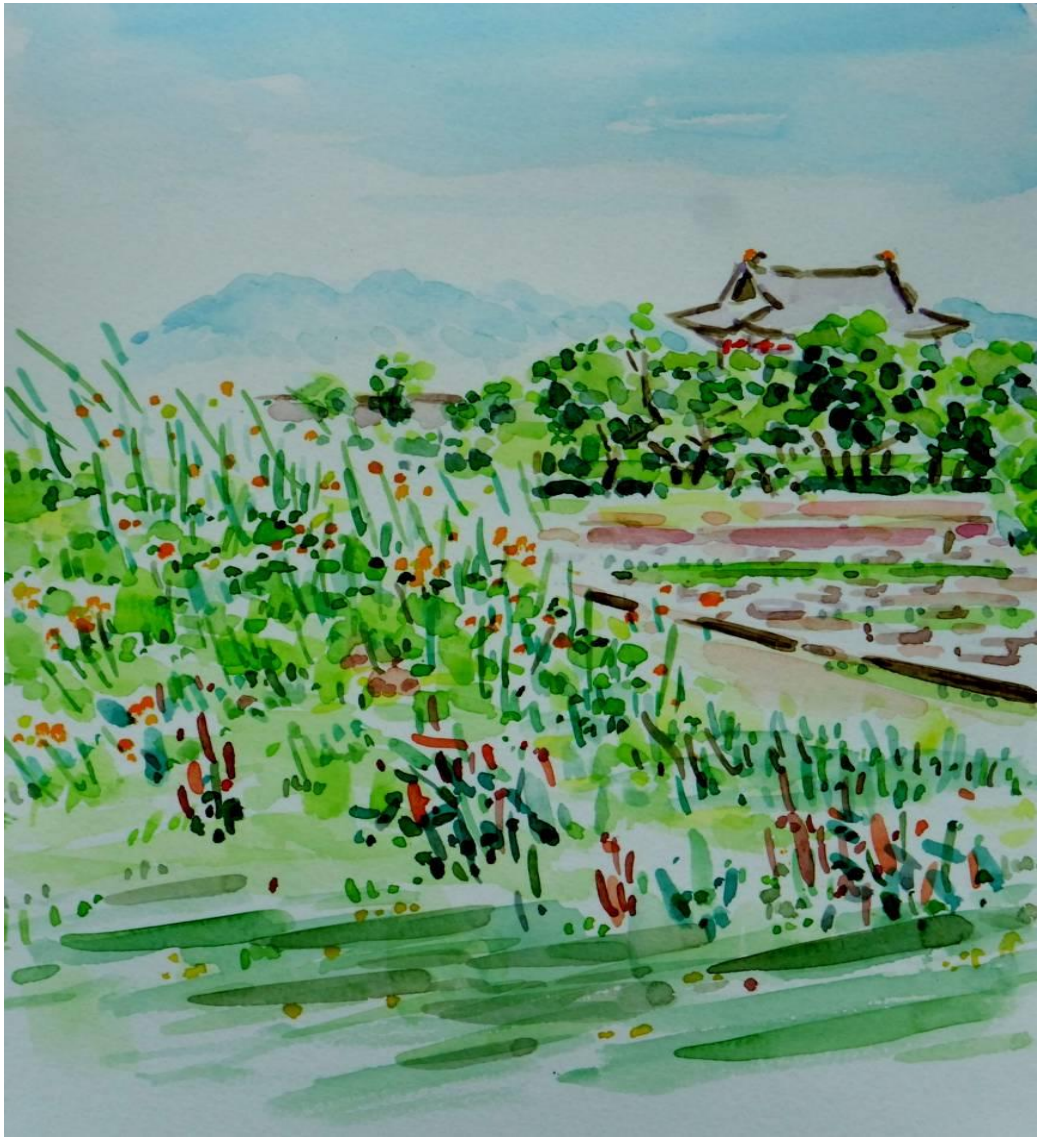
すっかり慣れ親しんだ奈良の都が荒れてゆくので、外に出て見るたびに、嘆きがましていく。

○和銅三年（７１０）の三月に、藤原京から平城京に都が遷り、さらに平城京から長岡京へ都が遷る延暦三年（７８４）の十一月までの間、古代日本の首都は寧楽（なら＝奈良）に存在したが、天平十二年（７４０）の十二月から天平十七年（７４５）の五月までの間は恭仁京（現在の京都府木津川市加茂町）難波宮（なにわのみや）、紫香楽宮（しがらきのみや）などに都が遷った。

○前記の歌二首は天平１２年（７４０）恭仁京（くにきょう）遷都で荒れ果ててしまった平城京を懐かしんでうたった歌である。

（参考文献）

日本古典文学大系「萬葉集」千田稔著「平城京の風景」等

（写生地）平城京第二次大極殿跡横地から雑草が生え荒地となった平城京址を描く。手前に回廊礎石、右端に復元した朱雀門、また、背景に奈良県御所市と大阪府南河内郡千早村との境界にそびえる葛城山（標高９５９メートル）を描く。

（池田杏花）